

南琉球八重山竹富島方言のアクセントとイントネーションについて

小川晋史（日本学術振興会/琉球大学）

南琉球の竹富方言のアクセントについては、平山輝男他（1967）にも言及があるが久野マリ子（1990）に詳しいデータがあり、そこで以下の2型アクセント体系が主張されている。

・ 単語のアクセント				
平板型	○○	○○○	○○○○	○○○○○
起伏型	○○´	○○○´	○○○○´	○○○○○´
（語末モーラで上昇）				
・ 派生アクセント節（助詞付き）のアクセント				
平板型	○○	○○○	○○○○	○○○○○
起伏型	○○´	○○´○	○○´○○	○○´○○○
○=モーラ、´=下がり目 久野（1990, pp115）を一部改変				

これに対して、本発表においては2型アクセント体系（平板型と起伏型）を認めつつも、久野（1990）が主張するような、「単語のアクセント」と「派生アクセント節のアクセント」の区別は必要ないと主張する。確かに竹富方言においては久野（1990）の「単語のアクセント」に見られるアクセントが中和したような平らなピッチパターンでの発音が観察されるが、これはそもそも竹富方言が日本語などとは異なり、文脈のない状況で単語のみを発話した場合にはアクセント（の対立）を付与しないで単語を発音することを許すことに理由があり、アクセントとして認定すべきものではない。さらに、文脈が与えられた上での発話であれば、たとえ助詞を付けなくても竹富方言のアクセントの対立（久野（1990）で言う「派生アクセント節のアクセント」）は表れることを主張する。竹富方言でアクセントの対立が明確に表れる条件の本質というのは、**単語に助詞を付加する**ということではなく、助詞を付加する等によって**一定の文脈が与えられる**ことである。

それから、久野（1990）の「単語のアクセント」起伏型にみられる語末でのピッチ上昇はイントネーション（もしくはそのようなアクセント型弁別の特徴は無い）と考えられる。竹富方言においては、断定などを表すイントネーションが上昇であり、疑問などを表すイントネーションが下降である。アクセントの平板型・起伏型の別によらず、語末（＝文末）を上昇させれば、断定という意味が付与される。疑問は終助詞が必須であるが、断定はコピュラが存在しないため名詞は形態的に裸で表れる。

最後に、①竹富方言の上昇イントネーションを②アクセントの言いきり形/接続形を持つ他方言の言いきり形と比較し、特に名詞述語文における類似点を指摘する。竹富方言は断定のコピュラを持たないため、①と②はいずれもが“語末＝文末”位置にのみ出現するという出現環境の類似点がある。それに伴って、会話における機能面でも類似点があり、①と②のいずれもが、音声的に表れなかった場合にはそこが文末位置ではないこと、音声的に表れた場合にはそこが文末位置であることが聞き手にわかるという機能を持つ。以上

参照文献 久野マリ子（1990）「第3章アクセント」『琉球竹富島の方言』國學院大学日本文化研究所（編）pp77-116.

平山輝男他（1967）『琉球先島方言の総合的研究』明治書院.